

開世

進步的目的

上

□ 9
3927
1





おむる愛の富貴とりども。正理を習きてを求め
ず。何れも正理を目的としてをむと。是れの人と
をりしづきあり

○心を懐き知りて初くりのあれをそまき
初んとする時正理を目的としてをむるは初
す。能くそむ物の富貴を考へ。さしてをむるを
そと退くべきを退くべし。愛も。人の榮耀榮花
より愛むと見えて。我もそむる愛しむるの
と思ふが人情も。則物も對しむる弱きて

愛のまむあり。されども我身かはお慈せざるなり。
自ら戒めて之とせよ。是正理は依るそ欲を情
おあり。是と正理を目的とするとりあり。

○心を以て情の裁判人とあすべし。情を目子
取らば愛くことごとく周りて。終るそ初く物も。あ
りしづき。人の榮耀榮花より愛むと見えて
立れば世しむるをすく。我も榮花を捨ぬ。
立れば世しむるのとありしづき。心の
裁世人是を裁おして。そむるお慈のそを

○只外國人の言似たるを以て異化とをば
りしを。信北の外白人皆賢ありし能く必賢長
才不才ありし。其賢ありしを就て其あべく。其
長ありし我より之より劣るべし。其必賢愚才不才
ありし。其外國人と雖も。我が信僧の佛を説く
ありし。其徒高説を信し。好んで奇異を説くも
のあり。偏彼等の少藉も見る。それを外國とい
ども信を我が信より同しとせしむべし。又彼の周
家理を信するとりしども。婦人の衣被するの不便を

抄めし。其地実用は佛を虚飾とせしむる
もの移りあり。家理の周といども信僧を釋破し
難しと知るべし。故に其家より外人の言似たる
もの。其化日をありと其時を大に信するあり。
勿論彼の言を我が周より先一異きて。其信姑
の言あり。其家理發明の説はくは新といふ。其
の學術ありし。其器械ありし。これを其言を採り。
我が日新の技けとありし。其言を採り。其化の域を
之。却て其言を信するの實効を以てし。其言を採り

を有るとりよと字書のみくも。あひもせふと
りよと字法あり。そ外もいふゆびさるあり。
まして中のぐ拙をまへあど。よ中よあぶさや
ち。あきうくと五十款をわくよあつぞよ也。

○ 第四 詞学びの目的

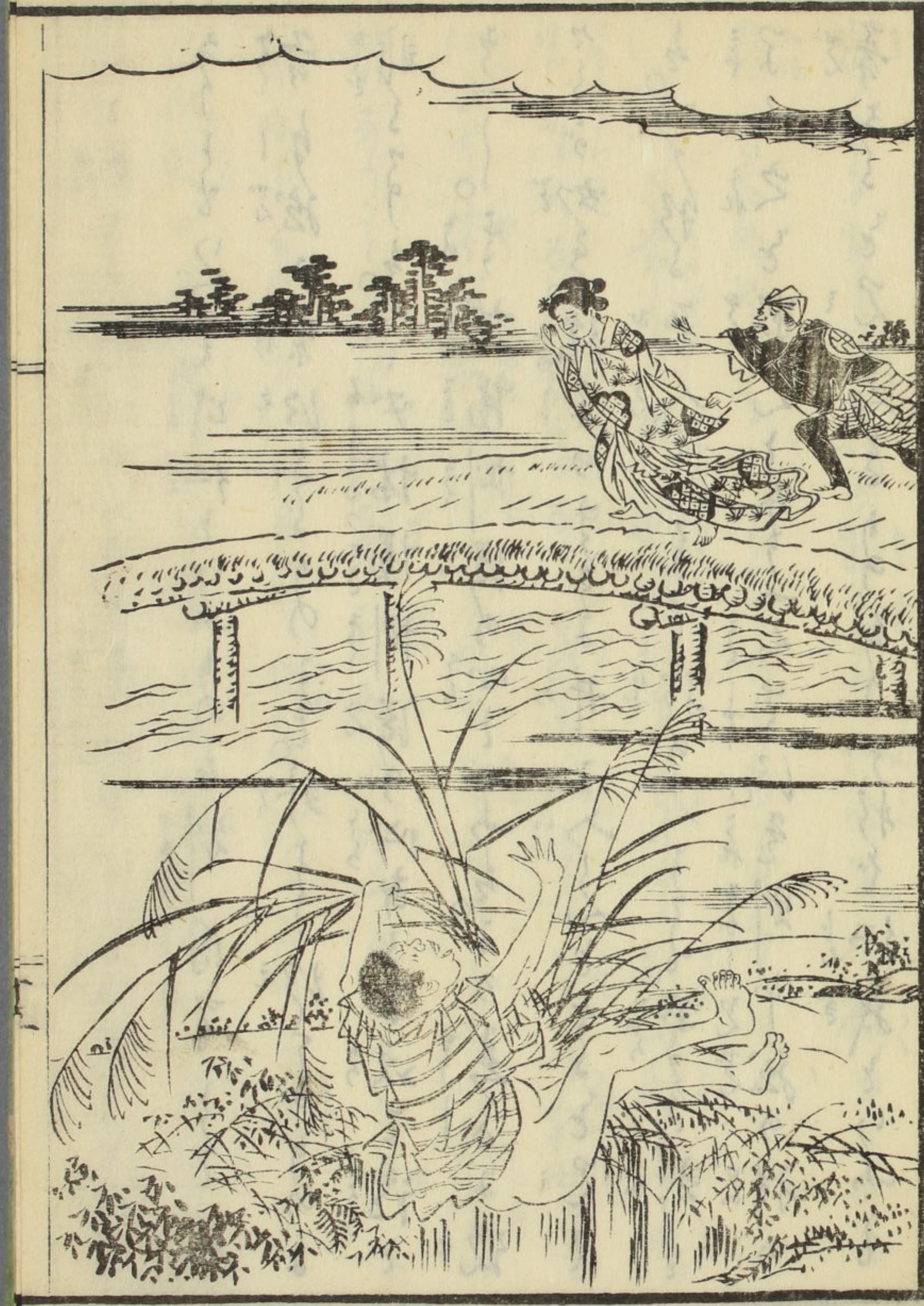
○ 詞をいつくより世々よりつりりれども。
今の詞といふも。移りつるは依るざるをあへ。そ
いふへの親分は連ふあられを今を今の詞
のまゝもあふべし。今の詞を俗言として卑し

あるを太いある。漢あり。知事五十款をせんえ。
縦横の活用をそりく。及必詞の学びを
べし。詞学びの目的を。雅言俗言等の論をい
ふ。世ありとあつる。詞の源を探し。俚言
方言よあつるまで。悉く知りて。所よりい漢あり
のあつるをそあひぶ。

○ 東京西京大坂のどき。耕舎の地といふも。俗
るりい漢する。詞あつるあつる。まへ海土を
よあつる。我をひふを漢り。い志を漢する。歌

ども。下記をば依りてよくせん事を目的として
ておつぐ。書を姓名を記しそのよしを記しその
を橋よりし。愚者の愚識をせんと思ふ人あり。又
其の然りとあふ人もあれども。大いなる誤りあり。計
をいひ出さるる人をその人の見識をいひかゝるる
その人の愚識も計測の中より脱して。尋常は其
あるべきあるをいひ。ほ世の世にてもあり。そのあり
ども。凡庸の人の計測を唱へて愚者の中より脱して
拙し。賢くも衣履を穿きを凌ぐものあり。あまむ。

文彩をいひぬわりのよしあり。されども巧まざり
巧まざり。之を若くも威儀を重んず。文字も其
如く。其の用を弁するのよし。拙きを破きしる
衣を脱し。必よきものを求め。つとめて
よくしるをん裁くべし。
○第六 算算の目的
○算算を人各其職業に用ひ弁せん事を目
的として。天文地理を算する算術の
如く。算算の教師とせん事を記すもの



人よ是あり所以のあり。其仁を心より存するを以て
ありともいふ。仁とりあひのち。別國有とて人
各り抱く稟はるもの。外より培はるものな
非ざる。人必林揚樹海の心あるを以て仁と
さす。其林揚樹海の心といふは。このまゝに
なるといふ。孺子のまゝに井に入るといふを以て
を。いふ。仁。悪人といふ。仁。強の人といふ。悲し
ましく之を救ふとあり。仁。是則ち然の性
吾ありを以て仁とあり。吾ありを以て仁とあり。吾ありを以て仁とあり。

我が持するの仁を以て仁とあり。吾ありを以て仁とあり。吾ありを以て仁とあり。
○我が常の仁。仁は中より生ずる。仁は
公。聖人あり。君子あり。我も仁より生ずる。仁は
仁より生ずる。仁は我の心より生ずる。仁は
仁ありともいふ。仁は我の心より生ずる。仁は
柔めるもの。仁は柔むるもの。仁は柔むるもの。
仁は天の尊貴より生ずる。仁は天の尊貴より生ずる。
仁は我が持するの仁を以て仁とあり。仁は我が持するの仁を以て仁とあり。

ざることをあきらむるは、
も。自らも喜ぶるものなり。自らも喜ぶるといふは、
喜ぶるを喜ぶるの喜ぶるを喜ぶる。道理は、
さういふことがあつて、
し。それゆゑ、
の。あきらむるは、
○ 君を尊とあつて、
あつて。子なる父母と慕ふ。
お睦し。朋友信をたす。皆中心の仁義

より生ずる。知るといふは、
ある。併し一人を尊とあつて、
の。あつて。子なる父母と慕ふ。
あつて。子なる父母と慕ふ。
これに、
○ 君を尊とあつて、
あつて。子なる父母と慕ふ。
お睦し。朋友信をたす。皆中心の仁義

より生ずる。知るといふは、
ある。併し一人を尊とあつて、
の。あつて。子なる父母と慕ふ。
あつて。子なる父母と慕ふ。
これに、
○ 君を尊とあつて、
あつて。子なる父母と慕ふ。
お睦し。朋友信をたす。皆中心の仁義

その如く拵びしきものと思ひ。人の英後英食を
 りを穿て。我も其如くしきものとあり。英人の
 欲も人情の常。あれを智むる事あり。只その業
 弊を拵め拵ぶりの餘力ありしは、其後英後
 英食する如きの餘力を拵て、其後英後
 逐ぐべきあり。

此を英の目的上平

變異辨

一名 天變地異拾遺

鳥山啓著 中本 全壹冊

此書は、小幡氏の著す所なり。天變地異拾遺と名づく。其の書は、今
 存山氏著す所なり。其の書は、天變地異拾遺と名づく。其の書は、今
 存山氏著す所なり。其の書は、天變地異拾遺と名づく。其の書は、今

筆算 要術 點竄早合点

坂本秀盛著 中本 全壹冊

此書は、筆算の要術を述べ、代算と云く用ひて、算を用ひ、其の書は、今
 存山氏著す所なり。其の書は、筆算の要術を述べ、代算と云く用ひて、算を用ひ、其の書は、今

書肆

大阪安土早甲目 右同 早

書林會社 石田和助

此書は、筆算の要術を述べ、代算と云く用ひて、算を用ひ、其の書は、今

